

Roman Book



かげろふの^{にきあふん}日記遺文

¥ 250

昭和38年3月25日 第1刷發行

著者 室 生 犀 星

發行者 野 間 省 一

印刷所 株式會社 文 弘 社
(大進堂製本)

發行所 株式會社 講 談 社
東 京 都 文 京 區 音 羽 町 3 / 19
振 替 東 京 3 9 3 0
電話東京 (941) 3111 (大代表)

© 室 生 犀 星 一 九 六 三

(落丁本・亂丁本はおとりかへいたします)

かげろふの日記遺文

室 生 犀 星



Roman Books

裝
幀
石
田
重
子

目次

一、花やぐひと	二
二、山邊の垣は	元
三、眞菰草	咒
四、町の小路の女	奄
五、山もしづまる歌	奄
六、うたたねのまに	二六

七、名もなき侍……………二二六

八、香の風……………二四七

九、くろ髪……………二六七

十、あたらし野の姫……………二八六

十一、長歌……………三〇五

十二、再會……………三三四

あとがき

三四五

原书缺页

原书缺页

原书缺页

原书缺页

かげろふの日記遺文

一、花やぐひと

彼女の眼を惹いてゐるわけは、見るとすぐにひやりとさせる顔の冷い美しさであつた。それにも増して何時も容易には笑はない子で、ただ、眼をチラつかせるだけで、それで言葉のかはりになり、笑ひの意味をも、つたへた。品とか位とかいふものを生れながら持つた女と見てよい、品と位のある顔はもう十七歳になつてゐても、こぼれる色氣を斥けてゐると言つてよかつた。雪のふる日にも簾をあげて庭を見守る日常には、その景色に相應しい顔だちと見るほかはなかつた。餘りに品の隆い顔といふものには、人の心を容れないあざけりが含まれてゐる、かうがうしいといふ感覚には抒情が乏しいものなのだ。

かげろふ日記の筆者である紫苑の上は、天曆七年には十八歳になつてゐたが、つやつや

しい皮膚の明りはもつてゐたけれど、高慢とも、あざけりとも見えるかほつきは深まる一方で、それは消えがたいものになつてゐた。これが平安のたをやめの一條件どころか、姫達の顔にさういふ弾くたかぶりを見ることが、色ごのみの喜ぶいかつきであつた。もつとも美しいものにその反對の嚴格がほしかつたし、それを踏み越える慘酷をかれらは競うて眺めた。そんな意味で紫苑は人の眼を惹いてゐたし、男に飢ゑを與へた。幼少の頃からあまかつら（甘味）を舐めるのにも、紫苑は誰知らぬ間にそれを舐め、湯あみするときにも乳人^{めのと}に、からだを隙見はさせなかつた。自然なおこなひに不自然に成長してゆく自分を、遠いものに見てゐたかつた。女である初見の日はこの若い姫の眼に、けがらはしさを自らに省みたほどであつた。なにゆゑにさうならなければならないかが、紫苑をくるしめた。矜持とか見識、護り、身分といふものとは別個なこのいざなひを、女はなぜに避けられぬかも或る日の永い不快さだつた。彼女は築山とか池とかの、諸々の草木を眺める間にも、その日の眼のけがれを感じた程だ、それも十八歳では次第に慣れては來た思ひだつたが、白綾^{かさね}の襲を着ぬ日はうつ陶しく、忌みきらふ日のうちでも、この日のつづくことは、木々の上にも、人のけがれを蔽ふやうながめを感じた。

或夜、紫苑はこの事を乳人に打開けようか、それとも以前のままで過ごして置かうかと、

その夜もまどひ續けた。それは兩の乳房の尖端にこりこりが出来、乳房のみねにしこりとなつて、だいぶ前から現はれて來たものであつた。女身といふものは何事も犯さずおとなに溫和しくしてゐても、或るいまはしい事がらを仄に考へてみた後には、からだに異常が顯現するものだといふ覺えるともない覺えが、紫苑に乳房の忌はしいしこりをあらはして來たことで、顔色をあをざめさせた。處女といふものはその考へにすら、迂濶に男の性を介入させてはならぬものだといふ教へが、怖れとなつた。だから、紫苑は手で肉體のいづくにもさはることを平常もしてゐないし、肉體が日にたわわになることが氣になつてゐた。ことさらに乳房にさはることは避けてゐたが、氣のせゐるか、さはれば遠い痛みがあつた。この痛みはそのまま打棄つて置くわけにはいかぬ氣がし、乳人にけふ話をしようか明日聞いて貰ふかにあせつた。

或夜、着替への折、紫苑は乳人の手を自分の乳房に持つてゆき、これを、と言つた。乳人は乳房のしこりをさぐり、そして痛むかどうかと問たずねたが、紫苑はいまは疼いたんでは居ぬと答へた。翌日、あかるい日の中で紫苑はあからさまに、乳人に見てもらつた。そして乳人はさはらずにその儘にして置くことに注意していつた。

「これは若い内によくあることで、そのままではいつしやれば何時の間にか、なくなつて

ゆく一時ひとときのあらはれにすぎませぬ。女が女として見られるまでには種々なからだの堰せきがございます。堰はたいせつに守つてやらねばなりませぬ。」

乳人めのとは何時も紫苑から反射されたまじめくさつた顔付で、お美事なお乳ぶさで何時でも御乳が事あれば、ほとぼしる時がやがてはございませうと言つたが、紫苑は心からいやな顔をし、紅梅襲を引き合せて匿してしまつた。からかはれた氣がして見せなければ宜かつたと思つた。それに、もひとつは乳人が着替へを頻繁にさせることが物慥ものあやうく、そのままにしていたもれと言ひ續けても、烈しい若さの發散物はあま酸すっぱぱく、かなしいよごととなり襟の錦をくもらせた。彼女は焚きこむ香の間に、みづからの肌の匂ひをかき分けることでは、殆ど束の間のあひだに、かぎ當てることができた。

十八歳の深秋、はじめて紫苑は亂調の長歌を作つた。どうにも、父、藤原倫寧とよやすにもはなされないし、乳人にも、召仕達めしつかひにも打開けても判らないもやもやにおそはれた。腹が立つ怒りにも似て、それとは、くらべられぬ物悲しさであつた。自らのために生きるのか、父倫寧に安堵させる成人の美しさに辿りつくためか、一さい生きることの目標をはつきり見定めたい氣持のいら立たしさであつた。「何しかは生きてこれの身を、うるはしと褒めもほりけれ、白きはてなきわが身の山にもかけて、そだち到いたきぬ。人の身の山かけ草かけが

よふは、をみなごのそは何のことがら、母にいらへ求むることにあらず、またよそ人に尋ぬることにもあらざれば、われは見ぬ、山かけてかがやく身の大きさ、うるはしとのみ言ふは愚かよ、花つくるは草木のみにあらざれ、わが身の今宵の照りは湯づとみ（沐浴）にあふれて、月悲しそなたにも似て。」

紫苑は書き終へて羞かしさに簾の外をうかがひ、再讀して顔をあからめた。どうして斯様に、あらはな事をかき記したかと、にはかに、紙をまるめてしまつた。筆とれば思ふままの振舞ひが書き分けられ、たうてい口にすることも出来ない恥かしさも、すらすらと書き述べられることの奇異と面白さに、紫苑はべつの紙をまたひろげて思ひの^{ひだ}襞をしらべた。書くといふことは心のままになることであり、書かれたことに對ふことの親しさは、自分といふ者のありかを確かりと掴まへられる氣になることであつた。いま一つ紫苑にあたへた異感の動きは、仕^{つか}の者の立居にも、朝夕の簀の子の景色、草木もいままでより媚びた明色に映り、とりわけ青い薄葉をのべた机のおもむきある紫苑の正座までが、後の世につながる思ひであつた。書くといふことの嬉しさの果に紫苑は生きる自分を見ることに、疑ひを持たなくなつた。彼女は自分にいひ聞かせてみた。何でもない事共でも書き溜めて、昨日がなにの爲にあつたか、明日はまた何のよすがで訪づれるかを、薄葉のうへに述べてみ